作品タイトル

『家族の思い出』

元にした作品のタイトル

特にありません。

著者名

川瀬えいみ

あらすじ

父の死で、それまで暮らしていた家を失い、家族同然だった愛犬ムギと離れて暮らすことになった小六のぼく。

よその家で飼われ始めたムギとの交流は続いていたが、ある時から、ぼくはムギに避けられるようになる。

自分はもうムギの家族ではなくなってしまったのかと、ぼくは落ち込むのだが……。

特記事項

『生きている者はみな、あまりにきびしく生と死を分かつ誤りを犯している』的な、家族の絆の話です。もしかすると、ジャンルは児童文学かも。

本編文字数

4863 字

最初におかしいと思ったのは、フェンスの向こうでムギが唸らなかった時だった。ムギが昨日までと違うって思ったんだよ。

僕が通う南小学校は、駅の向こう側にある。家を出て、児童公園の脇を通って、駅に着いたら、駅の構内を北口から南口に通り抜けて、そこから歩いて三分。

ムギがいるのは、児童公園のお向かいにある夏川さんっていう家の庭だよ。ムギは犬なんだ。ゴールデンレトリバーのオス。

夜は家の中で眠るんだけど、僕が学校に行く時間はいつも庭に出てる。たぶん、僕が通り過ぎたあと、夏川さんちのおばさんと朝の散歩に行くんだ。散歩に行くのが楽しみで、嬉しくて、それで、毎日フェンスの向こうで、ふさふさの尻尾をせわしなく振ったり、元気に跳びあがったりしてるんだよ。

それと、これは僕の希望的観測だけど、僕と会えたことを喜んで。

ムギはもともと、僕んちで飼ってた犬だったんだ。僕のパパが病気で死んで、ママがシングルマザーになるまでは。

僕のパパが癌で死んだのは、今から三年前の春。僕が小三の時だった。僕たちは、それまでは、僕のおじいちゃん（パパのパパ）が建てた家で、パパとママと僕とムギの三人と一匹で暮らしてた。家は、古いけど部屋がたくさんあって、大型犬のムギを室内飼いできるくらい広かった。

でも、パパが死んじゃったら、何もかもが変わってしまったんだ。

ママはシングルマザーになって、大人たちの話し合いの結果、僕とママはそれまで暮らしてた家にいられなくなって、近所の古いマンションに引っ越すことになった。

「そこではムギは飼えないの」ってママに言われた時のショックを、僕は今でもはっきり憶えてる。

だって、僕、生まれた時からずっとムギと一緒だったんだよ。

ムギは、僕が生まれる前、僕のおじいちゃんが死んだ時におばあちゃんが飼い始めた犬で、ムギっていう名前もおばあちゃんがつけた。おじいちゃんが死んだあと、おばあちゃんはしばらく一人暮らしをしてたんだけど、その間、おばあちゃんは、ムギにものすごく慰められたんだって。

おばあちゃんが死んだ時、僕を慰めてくれたのもムギだった。

パパが入院した時も、死んじゃった時も、（ママの前では泣けないから）僕はムギにしがみついて泣いた。

ムギは、僕の家族だったんだよ。今だって、僕はそのつもりだ。

僕とママから住む家を取り上げた親戚たちは、犬は欲しくなかったみたいで、誰もムギを引き取ってくれなかった。ママがあちこち探して、やっと見つけた引き取り手が夏川さんちだったんだ。

夏川さんちは、僕とママが暮らすことになったマンションと僕が通ってる小学校の途中にある。おかげで、僕は毎日、学校の行き帰りにムギに会えるんだ。

僕がフェンスのすきまから、「ムギ、おはよう」って声をかけると、ムギはいつも大きな体をもふもふ揺らしながら僕がいる方に駆けてきて、フェンスの向こうから僕に鼻を押しつけてきた。そして、僕に頭をなでてもらいたがる。

その時のムギの顔は、まるで溶けかけたキャラメル味のアイスクリームみたいに優しくて、やわらかくて、かわいかった。

そんな毎日が三年。ムギが僕に近づいてこなくなったのは、僕が六年生になった年の夏。ある日突然、ムギは、僕に向かって、「うーう、ぐるるるる～」って低い唸り声を響かせるようになったんだ。そして、僕が声をかけても、フェンスの隙間から手を伸ばしても、僕のそばに寄ってこなくなった。夏川のおばさんとは、これまで通り仲良くしてるみたいなのに。

生まれた時から家族で、僕の親友だったムギ。六年生の一学期まではそんなことなかったのに、僕は突然ムギに嫌われてしまったんだ。いじめたりしたわけでもないのに、犬が急に特定の人間を嫌いになるなんてことがあるのかな？毎日ずっと一緒にいられないせいで、ムギは、僕を“家族じゃない”認定するようになったのかな？　そんなのは悲しすぎるよ、ムギ。

一度、夏川のおばさんに相談したことがあるんだ。僕はムギが大好きだったし、ムギの態度が変わったのがすごくショックだったから。

もしかしたらレモンの匂いのせいかもしれないって、夏川のおばさんは言った。

だいたいの犬はレモンやオレンジなんかの柑橘系の匂いが苦手なんだけど、ムギは特にレモンの匂いが苦手らしい。レモンの匂いがすると、花粉症の人みたいに、くしゅんくしゅんとくしゃみが止まらなくなって、とにかく少しでもレモンのそばから離れようとするんだって。

僕は、「うへわあああっ」って、変な声をあげちゃったよ。

僕んちは、今年の夏からレモンの匂いでいっぱいだったから。

僕のママは（僕のママだけじゃないと思うけど）、暖かい季節にキッチンに出没する、あの黒い昆虫が大嫌いなんだ。背中の羽が黒く光ってて、急に顔に向かって飛びかかってくることもある、あの虫だよ。『ゴ』で始まって『リ』で終わる、あの虫。

今年の夏、はじめて今のマンションのキッチンでゴキブリに遭遇したママは、すぐにゴキブリ撃退のための研究を始めた。その研究の中で、ゴキブリはレモンの匂いが嫌いだっていう情報をゲットしたんだ。それ以来、ママは、家中にレモンのアロマを置くようになった。その匂いが、僕の体に染みついちゃったのかもしれない。

僕、学校で、友だちに「レモンの匂いがする」って言われたこともあるんだ。人間にわかるくらいの匂いだよ。人間よりずっと鼻のいい犬には、僕のレモン臭は、我慢できないくらい強烈な匂いなんだろう。

僕はムギが大好きなのに。ムギだって、僕が好きなはずなのに。

でも、ママにゴキブリを好きになってくれって言うことはできないし、言っても、ママはゴキブリを好きになれないと思う。多分、きっと、絶対に。

我が家は、『男は若死に』の家系なんだって。パパのお葬式で、親戚の人がそう言ってた。

僕も小さい頃から体が弱かったから、心配性のママは、いろんな病原菌を撒き散らすゴキブリを神経質なくらい嫌ってるんだ。

ああ、もう！　僕は、ムギに触れないせいで、ゴキブリよりレモンの方が嫌いになりそうだよ。

そんなことを考えながら、僕は今日も家を出たんだけど。

僕とママは、三階建てのマンションの三階の部屋に住んでる。ママが働いて

る会社は家から電車で三十分くらいのところにあるんだ。毎日、僕は、ママが家を出たあとに家を出る。

僕は、今日も、いつものように家を出て、ムギのいる庭の横を通った。僕に気づくと、低く唸るのが最近のお約束になってたムギが、今日は、すっと顔を上げて僕を見たきり、「うー」とも唸らない。吠えたりもしない。

寝てたのかな？　まだ寝ぼけてるのかな？　僕がいることに気づいたのに、ムギが唸り声をあげないなんて。もしかしたら鼻が詰まって匂いがわからなくなってるのかなあって、僕、そんなことも考えたよ。でも、僕は、ムギに唸られたいわけじゃないからね。久し振りの笑顔で「いってきます、ムギ」って声をかけて、そのまま駅に向かったんだ。

駅で、改札脇の部屋にいる駅員さんに「おはようございます」って、朝の挨拶。駅員さんからの返事はなかった。聞こえなかったのかな？

そういえば、今朝は、駅の構内に僕以外の小学生がいないみたい。いつもは通勤する大人たちの間をすりぬけて、北口から南口に抜けようとする小学生がたくさんいるのに。

なんだろ。いつもと駅の雰囲気が違う。

僕が駅の構内を突っ切るのは、朝の通勤ラッシュが最高潮の時間帯。

通勤ラッシュ時の駅って、大声でお喋りしてる人がいなくても、たくさんの人の足音や呼吸の音がぎゅうっと凝縮されたみたいに重たい音があってうるさいのに、今日は妙に静かだ。音がしないわけじゃないのに、その音がキッチンのスポンジみたいにスカスカな感じ。

それに、僕が駅の構内を北口から南口へ通り抜ける時って、いつもなら必ず誰かにぶつかるのに、今日は誰にもぶつからない。みんなすいすいと僕の脇を通り過ぎていく。誰も口をきかない。僕のこと、誰も見てないみたい。まるで、僕がそこにいないみたいに。僕が透明人間になったみたいに。

そんなことあるはずないよ。今日の僕は――今日も、いつもと変わらない朝だった。

鞄を肩にかけたママは、「タクミ。鍵と電気、忘れないでね」って、お決まり

のセリフを残して家を出ていった。ママは、七時五十五分の特急に乗りたいんだ。

僕はだいたい八時頃に家を出る。学校までは十分くらい。

いつも通りだったよ。ちゃんと時計を見たわけじゃないけど、いつも通り。ムギが僕を見ても唸らなかったこと以外、何もかもがいつも通りだった。

そのはずだったんだけど――。

今日はなんだか世界がぼんやりしてる。白い霞がかかってるみたい。足元がふらふらする。頭がくらくらする。まるで雲の上を歩いてるみたいだ。雲の上なんか歩いたことはないけどさ。

ここ、駅かな。いつもの駅？　僕、ちゃんとドアに鍵をかけてきたっけ？　はっきり憶えてない。僕は急に記憶喪失になったのかな？

みんなが、僕がいることに気づかずに、すり抜けていくみたい。僕、幽霊みたい。うん、そうだ。透明人間っていうより、幽霊だよ。だから、ムギは僕に唸らなかったのかな？

でも、僕には死んだ記憶はないよ。夕べ寝る時に少し寒気がしたけど、それくらいのことで昨日まで元気だった小六男子が死ぬはずがない。てことは、僕以外のみんなが幽霊なのかな。だから、ラッシュなのに、誰もせかせかしてないのかな。

まるで答えのない謎解きみたい。あ、南口の歩行者用信号がちかちかし始めた。急げば渡れるかな？

なぜだか、僕は、何かを考えるのがつらくなって、目を閉じようとした。――その時。

「きゅんきゅん！　わうばう、わうわうわう！」

急に犬の声がしたんだ。犬の声――ムギの声。はっとして目を開けると、ムギが僕の服の袖を咥えて引っ張ってた。

そのせいで倒れそうになった僕は、「うわああっ！」って声をあげた。

駅前交番のお巡りさんが、僕の声に気づいたみたい。僕の方に走ってきて、何か言ってる。けど、よく聞こえない。僕、やっぱり幽霊なのかなあ。

僕が目が覚ましたのは、病院のベッドの上だった。ママが心配そうな顔で、僕を見てた。

「熱が四十度もあるのに気づかないなんて、タクミったら！」

ママがそう言ったのは、僕を叱るためじゃなくて、僕がここにいる理由を説明するためだったみたい。

「気がつかなくて、ごめんね」って、ママは僕に謝ってきた。

今日、僕は熱が四十度くらいあったんだって。なのに、そのことに気づかず、ぼーっとしたまま、いつもと同じ時刻のつもりで、いつもより二時間遅く家を出た。いつもと同じどころか、僕は目覚めた時からふらふらだったらしい。

僕は幽霊じゃなかった。駅の構内にいた人たちも幽霊じゃなかった。

僕が駅に着いた時、通勤ラッシュの時間はとっくに終わってたんだ。だから構内にいる人の数は少なかったし、みんなのんびりしてた。

「ムギは？」

僕はママに聞いたけど、誰もムギの姿を見ていなかった。

幽霊だったのは、僕じゃなく、ムギの方だった。ムギは十五歳。人間でいうと、ものすごいおじいさんで――ムギは夕べ、静かに静かに死んでしまってたんだって。

でも、僕は、あの時、確かにムギの声を聞いたよ。ムギは、熱でふらふらだった僕を助けてくれた。

ムギは、僕のこと嫌いになってなかったんだ。

死んで幽霊になってたから、僕の体にしみついたレモンの匂いが平気になってたのかもしれない。そして、お別れの挨拶をしに来てくれたんだ、きっと。

だって、僕がレモン人間になるまでは、僕たちはすごく仲がよかったんだ。離れて暮らすようになってからも、僕たちは家族だった。

ムギは僕に、「嫌いになったんじゃないよ。大好きだよ」って、最後にどうしても知らせたかったのかもしれない。「僕たちは、いつまでも家族だよ」って、マロンは僕に伝えにきてくれたんだ。

ムギがいなくなった夏川さんちの庭のフェンスの向こう。

中学生になった今も、僕は時々、お日様の光がきらきらしてまぶしい夏の朝には、ムギが元気に駆け回ってる幻を見る。